4 月 23 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　24：　36 – 43

「まさしくわたしだ」

ルカによる福音書の描くイエスの復活物語はドラマティックです。

復活の日の朝、女性たちがイエスの遺体を清めようと墓へ向かうと、イエスの体は消えていました(「見ると、石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。」ルカによる福音書 24:2-3)。途方に暮れていると天使が現れ、イエスの復活を知らせます(「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」ルカによる福音書 24:6)。驚いた女性たちはすぐに帰って、他の弟子たちに告げ知らせますが「自分の見たいようにしか見ない」弟子たちは、彼女たちの話をたわ言だと一蹴して信じません(「使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」ルカによる福音書 24:11)。

その日の午後、やはり信じられないままの弟子が二人、エマオで復活のイエスと出会います(「二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」ルカによる福音書 24:31)。二人がエルサレムに戻ると、イエスを探しに出たペトロもまたイエスと出会ったと話題になっていました(「エルサレムに戻ってみると、……本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。」ルカによる福音書 24:33-34)。

ペトロの話、そして二人の話を聞いた他の弟子たちはどう思ったでしょう。自分たちの前にも現れてくださるのか否か、期待と不安とが混ざっています。そして同時に、まだ心のどこかにイエスの復活を信じられない自分を見出していたことでしょう。

そのような弟子たちの真ん中にイエスが立たれます(「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」ルカによる福音書 24:36)。心の準備ができていないとき、予想もしない出来事が起こったとき、人は恐れ、戸惑います(「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。」ルカによる福音書 24:37)。かつて、湖の上を歩くイエスを見たときと同様(「弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。」マルコによる福音書 6:49)、亡霊だと思い、動揺します。

イエスが生きているときも、イエスが十字架につけられても、そしてイエスが復活されてもなお、弟子たちはまだ「自分」から逃れられません。神の救いは永遠であり、絶えることがない(「天が煙のように消え、地が衣のように朽ち／地に住む者もまた、ぶよのように死に果てても／わたしの救いはとこしえに続き／わたしの恵みの業が絶えることはない。」イザヤ書 51:6)と知っているはずなのに、簡単に神への信仰が揺らいでしまいます。「たわ言のように思えて信じなかった」朝へとすぐ戻ってしまうのです。

「そこで、イエスは言われた。『なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。』」(ルカによる福音書 24:38-39)

手足のない亡霊などではなく、また、弟子たちの期待が勝手に作り出した虚像のスーパースターとしてでもなく、イエスは復活の主としてここにおられます。揺らぎながらもなお神を求める弟子たちの声に応えてくださいます(「主の慈しみに生きる人を主は見分けて／呼び求める声を聞いてくださると知れ。」詩編 4:4)。

勝手に期待し、勝手に裏切られたと落胆し、勝手に信仰を揺るがせる弟子たちを見放すことなく、今日もイエスは彼らの真ん中におられるのです(「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、……焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。」ルカによる福音書 24:41-43)。

だから、パウロは「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。」(コリントの信徒への手紙一 15:58)と、せっかく与えられた信仰に留まるようにと呼びかけます。

揺らぐときこそ、不安が増すときこそ、亡霊でも虚像でもなく、「まさしくわたしだ」と私たちの真ん中に立ってくださるイエスに全てを委ねて、真の安心を手に入れたいのです。